

## 地方だより

## 気象庁予報部予報課



天気相談所

気象庁予報部予報課というと、予報サービスの技術面からみれば、大へん複雑な性格をもったところである。

まず第一に国際的にみると、WMOで定められたアジアの三つの亜大陸中枢(sub-continental center, 東京, ニューデリー, ハバロフスク)のひとつ、極東および西太平洋(東経90度以东180度以西, 北緯60度以南赤道以北)の解析中枢, その範囲の天気図解析と予警報を行っている。これらの結果はJMB, JMC, JMG, JMHを通じて広く放送されている。

第二に国内的にみても、やはり全般海上予報区(sub-continent)の範囲と同じを)受もって、英文と和文で毎日6時間ごとに、警報(warning)と概況(summary)を作成し、気象庁船舶気象無線通報で、船舶に通報している。台風や猛烈に発達した低気圧が特定範囲に入ると、6時間間隔の中間に臨時警報(emergency warning)がつけ加わる。

1日3回放送されるNHKの気象通報(漁業気象)は、ニュースや経済市況のように、ラジオの放送にはなくてはならぬものになっているが、これも、むずかしくいえば気象庁予報警報規程第4章に定める全般海上予報および全般海上警報に属する仕事である。

第三の性格は、全国予報区を担当する責任官署、中央気象指示報を作る。台風指示報も中央気象指示報の一種である。

第四の性格は、関東甲信地方予報区の子報中枢、地方気象指示報が作られる。

第五の性格は東京都という府県予報区を担当する気象官署。東京都の毎日の天気予報の他に、東京都民に対する注意報、警報が行われ、都庁と防災上の連絡を常時緊

密に行なっている

第六の性格は東京測候所。日本の人口の一割近くが集中する旧東京市内には、それに応じた気象サービスや調査が当然必要となり、特別な測候所が必要なわけである。

警察をみても、東京都には、警視庁があり神田警察があり、その他に、膨大な人口がひしめき湧き立っているこの日本の首府を対象とした特別な組織がある。

このようないろいろな性格の仕事が、現場の気象技術者にいろいろと配分されている、これだけの多岐にわたる仕事に限られた人数で行われ得るのは、複合しているからである。現在予報課の業務のもっている6つの性格を第三以上と第四以下に分けようという検討が行なわれているが、限られた現在人員でどうしたら支障なく業務を行なうのかということに頭を痛めている。

課員のほとんどが学会員。しかし研究を至上と思う人々には、この仕事はむかないかもしれない。流れ作業なのだから、気象学の現場では理クツを言う前にノルマだけはやってもらわないと、はたが迷惑する。

誇ってもいい美風は、当り前のことかもしれないが、台風その他の異常災害時になると、ふだん、どんなに気の合わない同志でも、同じ目的のために、ピッタリと呼吸があうこと。台風作業室で、たまたま居合せた長官に、「申訳ない。それをとってくれませんか」といったら、「ハイハイどうぞ」とわざわざもってきてくれて、後で頭をかいた課員もある。

とにかく、みんなの力が全体となって、はじめてひとつの仕事が行なわれていくような職場では、いい意味の現場気質と、カラッとした人間関係の維持が必要になる。

(倉島 厚)



予報現業のようす